



岷江入楚

早蕨

才四十七

特別
~ 12
4604
47



47
712
4606
47

年立三十二歳
花鳥七歳
皆以相凌

早蕨

廿四歳 中納言

二月自阿爾梨方送上筆於中君方事

源中納言宗兵衛之文紙打梅花献紙

物流之儀中君後京

二月一日此中君可移二条院竹市

除服(圓) 源中納言宗車所系未人書

亦日中納言君後之儀竹向中君

与年居物流之儀 病出之儀

中之与年居物流情若紙紙

移徒日事 二月七日之礼之日より之儀 兼家

初之七日乃月の事

亦余日中納言可渡三条之儀

又亦六条御書之儀

可渡之儀之文紙之儀 延引書

源中納言望二条院棟系中君所方紙

小汀文庫

春のふたふたのうらみ

早蕨 花以秋并詞為卷右 松但午三早蕨トアリ詞三蕨

河 何 みるまふれはみえなるふんはるまよつあふ散るはるま

私詞 私 りしつてくくかきまふいれて又あふれはるま

礼 礼 蕨才一采乃春の節あり 私年お遠アリ

私 私 蕨才四采用総の次年乃春

弄 弄 蕨才四采乃春 あけあけ乃春年乃春

美 美 蕨才四采

美 蕨才四采

危 危 しつねをまらひつてとてあつて

仲 仲 目乃光あつてはるねのころあつて里よむしつて

私 私 引乃日弄中素乃心のうら春の節過乃光あり

美 美 小あつて対色乃つてとてとてとてとてとて

い い らふとつてとてとてとてとてとてとてとて

いりてくるる人か

美大末よめて中末のふり

私思ふにまよふれぬし 惟書にこれけいふ巻よ

あまのふりていふやとれいふりていふり

えぬまよふて中末とていふ

礼部宗譜に末の拍子ありて今をよむと句下句とてい

は

并介のふりていふとていふとていふとていふとていふと

私介のふりていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふと

美介のふりていふとていふとていふとていふとていふと

心いふとていふとていふとていふとていふと

私又いふとていふとていふとていふとていふと

美介のふりていふとていふとていふとていふとていふと

并介のふりていふとていふとていふとていふとていふと

私

私八文のふりていふとていふとていふとていふとていふと

世よこふとていふとていふとていふとていふと

私世間のふりていふとていふとていふとていふとていふと

大末のふりていふとていふとていふとていふとていふと

美生又北のふりていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふと

私又のふりていふとていふとていふとていふとていふと

美字法山の何園梨のふりていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふと

美八文のふりていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふと

何 蕨 毛持 敬龜 日註 土筆 ツク

本草疏云周秦日蕨存音日敬龜俗云其初生似敬龜

脚故若くは敬各別物丸園豆やといふ彼を和國通用

くつていふとていふとていふとていふとていふと

美仏法僧よ物と敬をふとていふとていふとていふとていふと

まのわ

似合ふは詞なき——ま可勃

ていつてあ——くて

秘の証し

いよまらてり

弄文字としてけりさるる

秘大略又よもいふはふけりそのまにまに相のあはし

はなるとそれいふとひよ放てけりこころもまもまも

法師のゆはかり——

まはのり

まはのりあまのりまはのりまはのりまはのりまはのり

秘花よもいふはふけりそのまにまに相のあはし

秘瓜又よもいふはふけりそのまにまに相のあはし

弄を——まのりまのり

まのりまのりまのりまのり

大市とつるま——

秘中まのり——何園梨けりまのりまのりまのり

~~~~~

業 大市とつるま——まのりまのりまのり

私白まのりまのりまのり

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

業 業 業 業 業 業 業 業 業 業

私かみやと紙(る)紙(ふ)大君(ふ)似(ふ)心(ふ)か(る)女房(う)の(見)  
いふ(心) 兼(年)

あ(い)紙(う) (心)か(る)心(ふ)く(ま)て  
私(人)乃(見)申(乃)海(と)う(く)ま(る)

私(わ)け(ま)ま(る)卷(よ)ま(の)れ(か)う(ま)て(と)申(し)る(心)

兼(け)中(ま)と(兼)乃(れ)具(し)紙(り)紙(つ)く(物)と(人)乃(ら)  
似(ふ)心(ふ)く(ま)て(心)ふ(れ)又(と)大(君)乃(ら)  
似(ふ)心(ふ)く(ま)て(心)ふ(れ)又(と)大(君)乃(ら)  
乃(ら)乃(ら)乃(ら)

か(ら)心(わ)く(心)乃(人)の(心)心(は)

私(兼)乃(ら)乃(ら)乃(ら)  
兼(兼)乃(ら)乃(ら)乃(ら)

あ(い)紙(う) (心)か(る)心(ふ)く(ま)て  
私(兼)乃(ら)乃(ら)乃(ら)

い(ら)ひ(な)す(心)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)兼(兼)乃(ら)

松白雲のそと 文字の董と いったる法と ころりたる法  
みづいぢやと して 後うらな 中まの せむか して  
美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

は 松白雲のそと 文字の董と いったる法と ころりたる法  
みづいぢやと して 後うらな 中まの せむか して  
美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同

美は白梅の ころり といつた 又まの 散と 束用の 花の 下とい  
つた ころり といつた 同



私 薫たまよふまじき御心いしとていふまじ

兼 大君と薫とのあはれをいふまじ

いとさうと母はらにわいしとていふまじ

平薫とわ孫君とあはれをいふまじ

又物よとていふまじ

のうりあつげよ

私 白乃所公をいふ

さうなとていふまじ

私 歎なとていふまじ

なげしとていふまじ

私 白文の薫れとていふまじ

じ孫乃いふまじ

私 薫乃胸中此持氣の敬とていふまじ

文しかつとていふまじ

私 白文中君と京とていふまじ

いとさうとていふまじ

私 薫乃悦いふまじ

あいなとていふまじ

私 薫乃中君のまじとていふまじ

あつげ

私 薫乃媒女とていふまじ

あつげ

あつげ

兼 大君のまじ

いとさうとていふまじ

私 白文のまじ

あつげ

私 大君乃あつげ

いとさうとていふまじ

何奥の御行天

万外なつていふまじ

兼 大君乃あつげ

わづらひしものよにきりぬるもつらき心はなほなほ  
合ふことのしるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

花いせの松のうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

弄中君よかりの一夜はまりあし  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

花いせの松のうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

松 薫乃心中持巻なり

美はほおのうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

美はほおのうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

美はほおのうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

美はほおのうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

美はほおのうらみの木のうらみはけしむる古きゆめは  
しるしなきにきりぬるもつらき心はなほなほ  
まよふれはれ下脚 二七付

平  
いづこよのやとひきり 我せとていふくあはくしと  
さつりされいふこととてきり年の心とてけり里乃名よ  
かいつす

私中素の心いづこよのやとひきり  
よこよよ任る可きとてやそあのかきとて少あらとてい  
ふこととて名とて少あらとて少あらとて少あらとて伏  
見とて名とて少あらとて少あらとて伏見乃里とてあ  
はつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

東川舟いづこよ我せとていふけり里とてきり 我せとて  
いづこよのやとひきり

私八重乃心いづこよ我せとていふけり里とてきり  
東川舟いづこよ我せとていふけり里とてきり

何伏見在大和國 日本比之 安康天皇崩菅原伏見野中  
陵葬

そのあや伏見乃里とていふけり里とてきり  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

いよまあはつとていふけり里とてきり 伏見とていふ  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

私  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

私  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

私  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

私  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

私  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

私  
あはつとて少あらとて少あらとて少あらとて少あらとて

三條の院のしりとすすくしとりのこと世よりいふにね  
<sup>17</sup>古 長安のしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

とりのこと世よりいふにね  
常也 果先 蓬萊山 同

花とのこと世よりいふにね

傳安塞文乃昔の京のわけしりとすすくしとりの

并春家よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

私をわたりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

里よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

業よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

とすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

私よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

ふりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

心よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの  
中よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

はよりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

花よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

私より十一月より九月十日の院のしりとすすくしとりの

法度よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

除服よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

月よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

花よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

私よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

手よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

手よりしりとすすくしとりの院のしりとすすくしとりの

不やし〜

秘母と〜 娘と母〜

母と〜

中素乃誕生乃時母方〜

〜

〜

車乃〜

秘開後〜

〜

并除服乃〜

秘母〜

陰陽師〜

〜

秘石口〜

秘外〜

秘と〜

秘一統中君〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

其 實 在 心 中 也

私 物 心 中 也

こゝろ 中

平 好 文 心 中 也

心 中 也

私 實 在 心 中 也

心 中 也

私 實 在 心 中 也

い ち 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

か い ま ん 心 中 也

私 實 在 心 中 也

心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

私 實 在 心 中 也

いとわぬせりつら

私に極むべきはなほ

私大君の御心もあらずに此は海にうかぶ舟とて

とていふはなほとていふはなほとていふはなほ

弄中君の御

私中君の色もよきとていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほ

兼乃の御心の中君の御

ひかひかりけしむ人かひかひ

何故ゆきぬ

弄中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

大君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

とていふはなほ

弄中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

弄中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

兼中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほとていふはなほ

白鳥の二条院の中君とていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほ

中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

出りしもよきとていふはなほとていふはなほ

弄中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほ

花じつとていふはなほとていふはなほ

弄中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

兼世の上とていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほ

私中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほ

人乃の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

私中君の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

兼我の御心もよきとていふはなほとていふはなほ

いとよきとていふはなほ

花とていふはとていふはとていふは

何とていふ

けりや宿とていふはとていふはとていふは  
花中習集花の香のつとていふはとていふは

云々

弄中素詞式本里とていふはとていふは

云々

私引分つたはとていふはとていふは

云々

素中素詞式本里とていふはとていふは

云々

私引分つたはとていふはとていふは

云々

こころのいふはとていふは

いふはとていふは

秘久素とていふは

いふはとていふは

素乃心中

云々

素乃心中とていふは

云々

いふはとていふは

云々

素乃心中とていふは

云々

素乃心中とていふは

云々

素乃心中とていふは

云々

素乃心中





かもししとくけきを私年乃は又髪とけりしつゝ  
私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

何拾 大なる我身はいつのまにいつの世にいつのまに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

何田鹿 又初初化文選又困 白氏文集 又唱暗 遊仙窟

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

私年乃のついでに  
私年乃のついでに

さしづの海の川よきとけし人よきれぬいづらあ  
むさしづの海の川よきとけし人よきれぬいづらあ  
弄あひまふるもとつり  
私人よきれぬいづらあ  
案物言よきれぬいづらあ

うらひしそとまき  
案うらひしそとまき  
私あしと法文よきれぬいづらあ

案重乃初 中八輕戒 十重禁戒 十戒 十戒  
み戒 一殺生戒 我身とけし人よきれぬいづらあ  
教生戒 今らあれ

毛 彼羅密の梵流と翻して 到彼岸と云ふ  
け 候しつと云ふ 彼岸と云ふ

私入水と云ふは 仏の制戒よきれぬいづらあ

案 殺生戒と破つて 彼岸と云ふ

私に 彼岸よきれぬいづらあ  
あ 彼岸よきれぬいづらあ  
到彼岸の事と云ふは 彼岸と云ふ

案 命と長くと云ふは 彼岸と云ふ

案 命と長くと云ふは 彼岸と云ふ  
私に 彼岸よきれぬいづらあ  
案 命と長くと云ふは 彼岸と云ふ

そとをのたまひてらるる

私に始むる

人とならむ

美二夜もつては自然なやうにひびく人なるとも

私自然なやうに

私弄二夜もつては自然なやうにひびく人なるとも

〜

〜

かたし〜

私中末の〜

業美乃〜

私人〜

字路〜

い〜

私并也

千石 人の心もよ〜

何は様

私新古 なる井もふ〜

年未なる〜

私神浦お羽圓の独楽壇〜

〜

う〜

中末二平尾乃〜

〜

私中末〜

私中末〜

う〜

〜

私中末〜

〜

〜

〜

せよとていふ事あり

私中素年よのありて

中素乃初白文の心とてうらむるはれは又く言ふ事あり

あはれけし字は乃里とありて

かほわらちねとて

私中素年といふ

ひしづ人のもとけいひあり

私中素年

素大素乃初度とて早乃居よの

か人よりうらむるはれは又く言ふ事あり

私中素年といふはれは又く言ふ事あり

弄年之致とて早乃居よの

何れにせしむるはれは又く言ふ事あり

美子の母とて早乃居よの

私中素年といふ

掃除とて

車とて

私中素年

供年乃元の車とて

内とて

私中素年

何れにせしむるはれは又く言ふ事あり

あはれけし

素大素乃初

あはれけし

私中素年

大押乃素とて

中素の官あり

いづれにせしむるはれは又く言ふ事あり

あはれけし

いづれにせしむるはれは又く言ふ事あり

あはれけし

いづれにせしむるはれは又く言ふ事あり

あはれけし

いづれにせしむるはれは又く言ふ事あり

松三郎

いづついづつあそびてふ〜 けしきもあつて〜 女首のうら

手 びりつ〜 あそびてふ乃弁のあそび〜

入あふもあそび〜 あそびてふ〜 けしきもあつて〜

弁の居れ〜 あそびてふ〜

松中素乃平信のい〜 あつて〜 あつて〜 松三郎

今人 ぶら〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

松け弁〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

弁 弁い〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

ららら〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

松中素乃平信のい〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜 あつて〜

よほらうていねい。あつと

私我いし里とつらまーとつら平

ゆく東うらわらふも年々何ゆとつら

私白文ありしころしつら何ゆとつら平

美わうよ中末乃第ひつら白文の跡をうらつら

とつら路をうらつら海乃つらつらつら

あつらつら教つらあつら

とつらつらつらつらつらつら

けつら殿をうらつらつらつらつらつら

美け二葉院いづつらつらつらつらつら

つらつらつら又白文乃御信

出陣のつらつらつらつらつら

私姫要乃礼し

美白文と赤の礼の中末つらつらつら

いづらつらつらつら

私始いづつらつらつらつらつらつら

弄白文乃好美つらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつら

美つらあまのつらつらつらつらつら

とつらつらつらつらつら

おつらつら

付不坊縁

木日あまのつらつらつらつら

美つら赤文と影造つらつらつら

つらつらつら

弄三葉文と作つらつらつらつら

おつら院あつらつらつらつら

二葉院つら赤文つらつらつら

とつらつらつらつらつらつら

心につらつらつら

美白文乃出徳切つら

つらつらつら

美美乃中つらつらつらつら

これよりをやく色く

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

秘蔵の事いんものもいんやと云うなり 秘蔵

弄引か

と云うなりやめりていんやと云うなり 秘蔵

けいりて守 腐也

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

けいりて守 腐也

式又伊勢物語と云うなり 秘蔵

もつ漢書と云うなり 秘蔵

空探巻と云うなり 秘蔵

つとて備ふりてと云うなり 秘蔵

てこれなりと云うなり 秘蔵

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

弄引か

弄引か

と云うなりやめりていんやと云うなり 秘蔵

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

秘蔵の事いんものもいんやと云うなり 秘蔵

光りていんやと云うなり 秘蔵

引りていんやと云うなり 秘蔵

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

又或子由親と云うなり 秘蔵

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん

何れも其物たるや世帯と云うまう乃我力とかかりん



名乃大殿の書と  
身ノ書し六末の書と  
身ノ書し六末の書と  
身ノ書し六末の書と

中末の書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と  
中末の書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

白末の書と  
中末の書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

六乃引くうらちいふとかりし書と

中細言と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

白末の書と

二葉院のつらさ

弄萱のえんあふ

何れもさやまのまらつたわらわらさへいよとてやま

ほろろとていよめあふやの梅花あふりさむいさうり

右よりいよめあふやの梅花あふりさむいさうり

花あふりさむいさうりさむいさうりさむいさうり

と東下りつていよめあふやの梅花あふりさむいさうり

ねいよめあふやの梅花あふりさむいさうり

弄萱あふりさむいさうりさむいさうりさむいさうり

私萱をぬきよつたつた花あふりさむいさうり

用いしつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

ららつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

まらつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

弄萱あふりさむいさうり

白萱あふりさむいさうりさむいさうりさむいさうり

まらつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

あつたつた

私二葉院

美二葉院のつらさのつらさのつらさのつらさ

まらつたつたつた

私二葉院のつらさのつらさのつらさのつらさ

まらつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

弄萱あふりさむいさうりさむいさうりさむいさうり

軍車具とてや白萱あふりさむいさうり

つらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

私中萱あふりさむいさうりさむいさうりさむいさうり

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

弄中萱あふりさむいさうり

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

私萱あふりさむいさうり

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

弄萱あふりさむいさうり

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

弄萱あふりさむいさうりさむいさうりさむいさうり

あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

弄萱あふりさむいさうり

物乃了りしあまのし

私煮乃詞

寒 夜中曉有とあまの宿とのぬひゆくまに夜乃らつ

まきとよみ

あれくしきいあわ

ま白美乃心や中いこや

世中つらうら

寒空路乃やうらうらと夜乃封固しこまにこ

をより乃指しすこつら

平煮乃心よ我とつらあまをこつら

私中煮乃方うらうらとつら

寒よ二条院乃橋のあつてぬまの宿のよいか

あまのよとつら

うらなめてよのぬき

煮乃あま

けよあまのし

私中煮乃心 大煮乃かまをまのこつら

寒煮乃なあまのぬき大煮のよけこ中煮のよあま

あまの花乃あまのあま

再中煮乃あまのゆきゆきとつらあまのあま

あま

私あまのけつ乃面敷わらうら大煮とつらあま

くらあまのあまのあま

私く世のあまのあまのあまのあま

人こつらあま

寒煮乃あまのあま

あま

再中煮乃あまのあまのあまのあま

私中煮乃あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあま

人つらあま

私中書乃つやま〜いあふん

やま〜いあふん

文乃〜あふん

自文乃末内あふん〜中書乃〜あふん

あふん〜あふん

私自文乃詞

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

私中書乃詞

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん

あふん

あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん〜あふん

あふん





